

## 虹

## ここにルーツがある

## ①45 町の歴史と文化の番人に



「学芸員は町の歴史と文化の番人」と語る川端さん

朝日町の海岸にはヒスイが打ち上げられる。100カ所を超える遺跡の半数以上が縄文時代のもの。縄文人たちもヒスイを拾っていたらしい。

出土品を間近で眺められるのが、埋蔵文化財保存活用施設・まいぶんKANだ。学芸員の川端典子さん(47)は「縄文時代のこの辺はきっと栄えていたはず。海岸で拾ったヒスイをブランド化して全国に流通させたのですから」と語る。

川端さんは企画展の準備を始める前には必ずノートを用意する。並べる収蔵品のリスト、テーマに合わせて調べたこと、配置図を書き込む。収蔵品の写真も貼り付ける。デジタルではなく、もっぱらアナログ派。「実際に自分の手で書き込む方が頭に入ります」。一つの企画展でノートに記す配置図は10案以上になることもある。

西陣織工場だった施設の建物は細長く、展示空間としては個性が強い。制約の中で土器や石器をどう見せるかは、学芸員の腕の見せどころになる。3月まで開かれていた企画展では、収納しやすく使い勝手のいい展示台を自分で設計した。展示台の足元には赤い実を付けた植物を置いた。無粋な仕切りを使わず、展示品を守るためだ。施設の常連客、橋 草子さん(72)は「いろいろな所に行くけど、まいぶんKANは古いものへの情熱を感じる。解説も分かりやすいんですよ」と話す。

展示に独特のセンスを見せる川端さんにとって朝日町は父の故郷だ。自身は神奈川で生まれ育ち、以前は東京で活躍するインテリアコーディネーターだった。



10代は本の虫だった。外国文学が好きで、近所の書店に足繁く通った。花柄の版画をモチーフにしたブックカバーを掛けてくれる書店だった。そのカバーを付けた本から異国の空気を感じていた。お気に入りの一冊は、ドイツの考古学者シュリーマンの『古代への情熱』。トロイア戦争の物語を絵本で読んだ少年が、地下に古都が埋もれていると信じ、発掘しようとする自伝だ。川端さんも未知のものへの憧れに共感した。

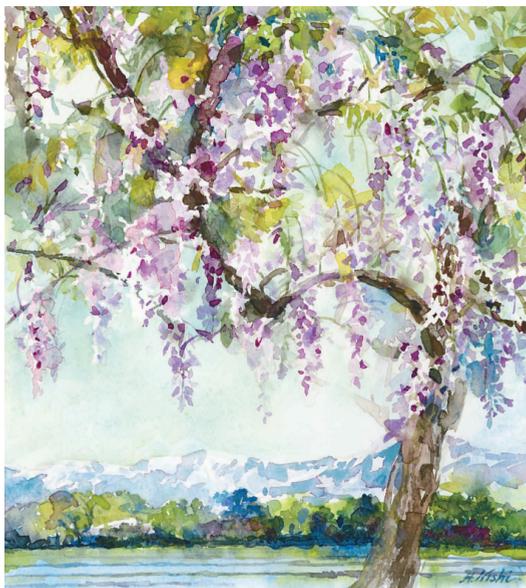
読書好きだったことから日本語教師になりたいとも、実家のリフォームをきっかけにインテリアコーディネーターになりたいとも思っていた。結局、親の勧めで大手企業の事務職に就職した。古い体質の企業で

女性に任される仕事は限られていた。川端さんは定時に帰る生活よりも、やりがい求めた。すぐに転職を意識し、インテリアコーディネーターを育てる学校に通った。資格を取ると退職届を書いた。

リフォームの現場監督や営業職を経て、衛生陶器大手のTOTOでインテリアコーディネーターになった。しゃれたカーテンや家具を選ぶだけではない。キッチンや風呂など水回りの配管も含めて提案する。1件につき、数十の案を用意した。扱う商品や周辺知識をいつも勉強しないといけない。事務職とは違うやりがいがあった。



経験を重ねると、現場を離れて管理職に就くよう打診があった。部下の管理や、数字とにらめっこするより、現場にいたかった。仕事をリセットしたい衝動に駆られた。経験があるので同じ業界に復帰する自信も



「藤花揺れる」西治子

あった。2008年、35歳で退職した。

気分転換に訪れたのが朝日町の父の実家だった。毎日自転車で町内を散策した。4月下旬に差し掛かり、舟川べりの桜が散り始めた時期だった。毎年盆暮れには訪れていたが、春の富山は久しぶりだった。

時間だけはあった。前年にオープンしたばかりのまいぶんKANに足を運んだ。展示されているいびつな形をした縄文土器を見て、ときめいた。「どんな人が作ったのか」「この模様の意味は？」と想像を膨らませた。何よりも「ここに自分の先祖がいたかもしれない」と胸が躍った。近所の人に「今日もご苦労さま」とあいさつされるほど、毎日のように訪れた。

県内外の博物館も巡ったが、まいぶんK

ANほど面白くはなかった。「朝日町にはルーツがある。一つ一つの土器の背景にあるものが自分事という気がしました」

頭をよぎったのが、アメリカの作家ウィリアム・サローヤンの小説『パパ・ユークレイジ』にあった一節だ。主人公に作家である父がこう語り掛けていた。「作家というものはこの世界に恋をしていなきゃならないんだ。さもなければ彼は書くことができないんだ」。朝日町は思い出深い大好きな場所。作家ではないけれど、ここで何かしたかった。都会でお金を使って遊びたい年齢は過ぎている。「海や山が身近にある暮らしも悪くない」と移住を決めた。



まいぶんKANとの出会いから歴史を学ぼうと思った。「何かに役立つかも」と通信制の大学で学芸員の資格を取った。町役場の嘱託職員や、インテリアコーディネ

ーターとして働きながら、大学院の聴講生となり、考古学を学んだ。

知識を得れば生かしたくなる。知り合いの学芸員から文化庁の助成制度について教えてもらった。博物館に所属せずとも、実行委員会をつくれれば、調査や企画展に必要な助成金を得られるという。町内会を巻き込んで実行委員会を立ち上げた。新参者の川端さんの一風変わったお願いを、住民たちは面白がってくれた。

調査したのは不動堂遺跡で出土した5500年前の土器に残る種子の痕(圧痕)だった。70人以上が調査に参加してくれた。エゴマやシソなどがこの地に暮らした縄文人の身近な植物だと分かった。近隣の遺跡の花粉調査から、当時の集落にはクリ林があった

と推測した。調査結果を基に当時の不動堂の風景を絵で再現した。協力した考古学の復元画家、安芸早穂子さんは地元の猟師や農家の人を引き入れ、プロジェクトを進めた川端さんの姿が印象的だったという。「助けてもらえるのは地域の風土と結び付いているから。考古学は科学だけれど、彼女のような地元の暮らしになじんだ生活者目線も必要なんです」

川端さんは実行委員会のメンバーとして、調査に関われれば満足だった。しかし、まいぶんKANで学芸員のポストに空きが出た。期待せずに応募すると、実行委員会の取り組みも認められて採用された。

16年に学芸員になると、まず施設の入り口付近に縄文期の野生植物を栽培する庭を自ら整備した。古代人も食べたエゴマや、編み物に使った繊維植物のカラムシを育てる。実際に体験するからこそ分かることがあるという考えだった。

初めて企画したのは、町内の遺跡から発掘されたヒスイの展示だった。幼少期の記憶がきっかけになった。亡くなった祖父がよく宮崎海岸で石を拾い、ヒスイも探していた。川端さんも休日には海で石を拾った。町を歩けば、古い石仏や石塔に出くわす。川端さんにとって朝日町は石の町でもあった。「遺跡の住人であった古代人たちがどんな気持ちで海を眺めたのか。石を拾っていたら分かる気がしました」

まいぶんKANは、学芸員が川端さん1人だけという小さな施設だ。企画展を準備しながら、土器の修復や洗浄も全部1人でやる。それでも地域の博物館は一つだけ。歴史的なことなら何でも頼られる。誰かが亡くなり、珍しい遺品があれば持ち込まれることもある。価値がありそうなら大切に預かる。「将来にわたって町の財産になるか考える。町の文化と歴史の番人みたいなもの」

川端さんにとって町は、長い時間が積み重なる特別な場所だ。歴史の上に今がある。展示する土器や石器にはその不思議を伝える力がある。かつての自身も魅了された。

まいぶんKANのすぐ近くには、不動堂遺跡があります。縄文時代の住居跡が当時の原寸大で再現されています。その背景には朝日岳が見えます。縄文時代を生き抜いた人たちも同じような景色を見ていたのかと思うと、不思議な気持ちになります。施設を訪れたら、ぜひ足を運んでみてください。



## 「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121~140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたまをエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50  
北日本新聞社西部本社「虹」係  
FAX 0766-25-7773  
次回掲載は6月1日(火)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに



企画・制作/北日本新聞社営業局